

その他

渡部律子名誉教授オーラルヒストリー

—ソーシャルワーク研究と教育の道のり：
1990年代後半から2011年日本の大学での教育と実践—

2022年2月19日実施：第2-2回インタビュー
渡部律子先生，聞き手：岩永，大輪，阿川，太田，辻村

岩永理恵，渡部律子，大輪 礼，阿川千尋，太田聡子，辻村あずさ

Oral History of Professor Emeritus Ritsuko Watanabe Becoming Researcher and University Professor:
Education and Practice at Japanese University from the late 1990s to 2011

Rie IWANAGA, Ritsuko WATANABE, Aya OWA, Chihiro AGAWA, Tomiko OTA,
Azusa TSUJIMURA

要旨：渡部律子先生に研究と実践のあゆみを伺ったオーラルヒストリー報告，第4回目である。日本に帰国後，関西学院大学総合政策学部で就職が決まった。新しく創設された学部の良さがあり，進取の気性に富んでいる学生たちと出会え，熱心に教育に取り組んだ。奥川幸子さんと出会うことで，日本の実践現場とのつながりが生まれ，実践と理論を結びつけるような本の執筆にもつながった。実践家との勉強会も行い「気づきの事例検討会」「面接への招待」という教材ビデオの作成も行った，質疑応答を通じて，以前にお話いただいたアメリカの経験と日本で経験されたことの対比や，介護保険とソーシャルワーク，ケースマネジメント，ケアマネジメントに関する考え方をうかがった。

キーワード：オーラルヒストリー，ソーシャルワーク研究，ケアマネジメント

IV. 日本の大学での教育，実践との関わり (1995年から2011年)

■日本の新設学部での教員生活：関西学院大学総合政策学部という新しい分野での視野が広がる経験

1995年に日本に帰ってきて，とても幸運なことに，私の母校の新設学部である総合政策学部で仕事が決まりました。ただし，バッファロー大学

でも本当は一人しか採用しないと言われてるのを，特別に二人目として採用していただいたんですが，総合政策も同様だったんです。最初，仕事が決まっていたのは夫でした。総合政策学部は私のようなミクロをやっている福祉の人間はその時，不要だったんです。でも，アメリカまでリクルートに来てくださった先生が私の研究のことも熱心に聞いてくださったんです。その先生は，私

のことを採用予定者の妻だからという扱いをすることなく、どんな研究をしているのかも真剣に聞いてくれました。私も「こんなことを教えています」と、教育のことも話しました。その結果、先方生が日本に帰ってから新たに私にもポジションを見つけて下さいました。新設学部だったので結構自由なところもあって、私が教えられるような科目を学部にあわせて教えることになりました。ミクロの領域でしか仕事をしてこなかった私ですが、政策学部に行って視野が広がりました。先生たちは多様な分野の方々と、お互いの研究のことを深く理解するのは、むずかしかったと思います。ある時期の私の隣の部屋の先生は海洋生物学者です。向かいの先生二人は言語学者です。もう一つ隣は建築学者です。よく隣のお部屋に行ったり向かいの部屋に行ったりしてしゃべっていると、この領域ではこんな視点で研究にアプローチするんだとか気づけて、すごく勉強させてもらいました。総合政策学部は、たとえを使うなら、「様々な専門店」の集合体かなという感じでした。自分の研究領域だけで物を考えてはいけなさと教えてもらえました。

■進取の気性に富む学生たち

面白かったのは、新設学部効果というのだと思いますが、海のものとも山のものともわからない学部挑戦してくる学生さんで、進取の気性に富んでいる、ものすごく面白い人たちがいたんです。最初の何年間はそれが続きました。その人等は、今でも挑戦を恐れず色んなところで生き伸びてくれています。レジリエンスを持った学生たちです。へんぴな場所にできた大学で、大学まで最寄りのJR駅からバスで20分かな、当時日本でもまだ学生数が増えていたので、東京近郊でも一緒だったと思うんですが、郊外に学部を増やしている時代でした。はじめてその市に大学が来たという地域だったんです。そのために、近隣の市

が何かの委員会をする時、学識経験者という名目で、大学の教員の私も呼んでもらうことができました。おかげでいろんな人と出会えました。様々な自助グループの人たちと親しく付き合わせてもらえました。そこで本当に学びました。「障がい者だからって〇〇とステレオタイプで考えてはいけない」というようなことをいっぱい教えてもらいました。その方たちは、私が大学の教員だから何もできない、などとは思わない人たちでした。小さな市だったのでできたと思うんですけどもね、私が提供できるものと、その人たちが私に提供してくださるものを一緒にして、シンポジウムを開いて率直に私たちが思っていることをお伝えし、コラボすることもできました。ふり返ってみると、もっと大きな都市なら政治的なこともあり、あんな自由な活動はできなかったのだらうなと思います。

■実践現場とのつながりの再開：

奥川幸子さんとの出会い

日本に帰って総合政策学部というところに行かったので、もう私は実践とは切り離れた生活をするのであろうと考えていました。これから私がする研究というのは、ミシガン大学でもそうだったんですけど、数量的な研究などで、もう実践に携わることはできないと思っていたのです。でも、1995年のクリスマス頃、新たにチャンスをもたらしました。これは今も本当に感謝をしているのですが、私がアメリカに留学していた時に研究者として留学されていた、今も日本で活躍をしていらっしゃる白澤政和先生と知り合うことができたのです。その白澤先生からある日電話がかかってきて「会わせたい人がいる」と言われました。「どなたですか」とお聞きすると、「奥川幸子さんという人で、優れた実践家です。一緒に研修講師をして欲しい」ということだったんです。「先生、私、体調も良くないし、もうそういうことは

しないことにしています」って言ったのですが、「一回だけ、一回だけ会議に出ておいで」と言われました。忘れもしません、1996年の1月4日から5日に東京の全国社会福祉協議会の霞ヶ関にある立派な会館で、会議に出ることになりました。私はそれがよっぽど不安だったのでしょう、当日鼻血を出してしまい、鼻にティッシュペーパーを詰めて新幹線に乗りました。霞ヶ関のビルでも、もう足はなかなか前に進みません。すると大きな声で「ハッハッハッハ」と、とても元気よく笑っている女性がいました。それが奥川幸子さんとの出会いでした。その委員会、白澤先生ともうひとかたは男性でしたが、他は全員女性で、皆さんすごく自分の意見をしっかり持った自分の話ができる方々でした。ここでなら一緒に仕事ができるかもしれないと思い、当時はまだ在宅介護支援センターを対象にした研修に参加させてもらいました。そのことが、今の私の実践家の方たちへの研修講師やスーパービジョンや事例検討会に繋がっています。しかし、以前対話者Aさんが質問してくださった、海外理論の応用という問題が常にあります。「私がアメリカで学んだことは封印しなければいけない」という自分で自分を縛る思いとの葛藤が付きまといました。「日本に帰って来たらアメリカで勉強してきたことなんて通用しないから忘れるように」とか「日本は全然アメリカと違うからね」とか、たくさん言われて帰って来ていたんです。さらに、「日本の学生は全然勉強しないから気を付けるように」など、不安材料がありました。しかし、それらが少しずつ打ち砕かれていく非常にポジティブな経験を、時間かけてすることが出来たんです。しかし、時々不安になることもありました。

奥川さんは、「この人本当に日本人か」と思うぐらい言いたいこともズバズバ言うし、実践でも自分が信じたことをやってらっしゃる。その実践されている内容は、私がアメリカで学んできた

ソーシャルワークの理論でほとんど説明することができたんです。奥川さんはそれをちゃんと見抜いてらして、自分にとっても私は大事な存在だと言ってくれました。「あなたが私の言葉を理論で言い換えて、私はそういう言葉を使わないから」と言われました。だから、よく二人ペアで仕事をしました。ある編集者に言わせると、私たちは規格外れの人間だったらしく、「割れ鍋に綴じ蓋」と言われました。これは決して褒め言葉ではありませんが、私たちは「いいよね」と言って、一緒に信じる道を歩くことができました。奥川幸子さんはなぜ日本で通用したか？言いたいことを、色々とおっしゃるんですがね、仕事の時はすごく慎重に考えてやるんです。「これをどこでどういうか」ということをきちんとわきまえていました。実は、実践理論をアメリカ留学をしてきた先生から学んでらしたんです。私は奥川さんを「駅前留学」と呼びました。「奥川さんはアメリカ留学してないけど、駅前留学したんですよね」って。アメリカでソーシャルワークを勉強してきて、後々早稲田の先生になられた深澤先生にずっとグループスーパービジョンを受けてらしたんです。その奥川さんが言ってくくださった言葉が、今でも私の中では凄く役に立っています。私が「やっぱりこんなことしたって結局きちんと聞いてももらえないし、無駄なことをしてるのかも分からない」と言ったら、「ごまめの歯ざりでも犬の遠吠えでも、いつかは誰かが聞いてくれるかもしれない。吠え続けなさい。」私のやってることも、どこかで誰かが読んでくれて、「うん」って思ってくれるかも分かりません。実践してくださっている方の中には、「役に立ってます」って言ってくださっている方たちがいるので、私は単に横文字を日本語に翻訳しているだけではないと思えました。実践家の方たちから色々教えていただいて、自分が学んでいる考え方を修正し続けています。ここまでの話を聞いていると、私がラッキーで

良いことばかりに出会ってきたように聞こえていると思うので、ちょっと違うことも言いますね、もちろん日本に帰ってきて辛い事もいっぱい経験しました。アメリカから帰ってきてアメリカ風を吹かせていると一部の方たちに捉えられたこともありました。それから私がぼうっとしているところが多々あるので、人に利用されたこともあります。でもそんな経験もしつつ、その中で学んだこともいっぱいあります。「これはすべきか、すべきでないか」の判断は大切です。そうしつつ、何かお仕事を貰ったらちょっと背のびするのもいいかなとも考えます。原稿執筆依頼とか講演とか学会活動などで、ちょっと今の私の力では難しいと思うようなテーマで喋ってほしいとか書いてほしいとか言われたことがありました。でもそんな時、新たなテーマをいただいたことで、新しく本を読んだり新しく人にいろいろなことを教えてもらったりして、世界を広げることができました。

■初めての単著の出版

初めて単著を出しました。これも奥川さんからの紹介だったんです。最初は、雑誌の特集号で奥川さんに来た仕事だったんですね。相談面接の原稿を医歯薬出版の月刊総合ケアから依頼されたらしいのですが、「私はもうそのテーマあんまりやってないのよね」って、奥川さんすごくて、寛容な人でね、人にいっぱい仕事もくれるんですよ。「律子さん書きなよ」ってね。「書けないよそんなの」って言ったけど、奥川さんは人を「よいしょ」するのも上手くて「あなた絶対書けるわよ」と言われて。私すごく頑張ったんですね。これ、アメリカから帰ってまだ時間も経ってなかったんで、ちゃんと本はもう一回読まなければいけないとかね、参考文献も引用もちゃんとしなければいけないとかいっぱい思って。本当はもう少しカジュアルなものでよかったらしいです。でも持ってるもの全力投入して書き上げました。その

結果、お手紙が来たんです。出版社に、当時の老人福祉関連のとても偉い人から「真っ当な原稿であつた」そして「実践をしっかりと理論と組合せてくれた」と。実践に理論の裏付けをしてくれてとか、そういうことを何人かの方が出版社に向けて書いてくださったんです。それでその編集者の人が、これは本にできるかもと思って「本にしましょう」っておっしゃったんですね。私は「もう書けません」って言ったんです。私が書いたことはもう誰でも知っているはずのことで、アメリカのテキストにならいっぱい書いてありました。「私はそれを一生懸命自分なりに言い直しただけです」って言ったら、「時間が経ったら書けなくなります。今だから書けるんです。」と励まされました。結局、雑誌刊行から2年ほどした1999年に出版できました。その後、日本の実践の実情と皆のジレンマを知るにつれて、こんなこと言ったらいけないかもとか、変に考えるようになりました。私が段々と日本の文脈に戻って来たから、だからあの時じゃなければ書けなかった。そう思います。読んで下さった方々から、何が良かったと言われたかという、序文なんです。私「はじめに」で、どうして私が留学したかったか、何で私がこの本を書こうと思ったかとか、アメリカにいた私が気づいたことを書きました。難しいことじゃないんですよ、私は、アメリカにメーテルリンクの「青い鳥」を探しに行ったつもりだったんです。アメリカには絶対すごい解答があるだろうと思って。私、実践家として力をつけたかっただけなんで、実は研究者になるつもりなんかなかったんです。そんな力がないのはよく知っていましたから。ところが残ったんですね、大学に、「青い鳥を探しに行ったけど、実は青い鳥は日本にもちゃんといたんだ。でも青い鳥が青い鳥だと知るためには、アメリカでの学びと実践は役に立った」、みたいなことを「はじめに」で書いたんです。すると、そこが受けました。後に、久保絃章

先生が書評を書いてくださいました。久保紘章先生は、私がアメリカに居る時に当事者グループ、セルフヘルプのことに関心を持って比較研究論文を書いて以来何度かお手紙をくださって、私は久保先生に恩義を感じていて、人間としてもすごく尊敬していたんですね。私は、最初の単著『高齢者援助における相談面接の理論と実践』（医歯薬出版）を高齢者福祉に向けて書いたんですけど、「あんな本をソーシャルワークを主テーマにして書いて欲しい」と言ってくださって、ずっとこれが私の中に残っていました。そこで、2019年にミネルヴァから初めてソーシャルワークという枠組みの中で、中身はそんなに変わらないんですけども、実践と理論を結び付けられるような内容の本を書いてやっと恩返しができました。その久保先生つながりで、久保先生が法政にいらっしゃった時、3年かな、ずっと夏休みの夏期集中の大学院の授業に行っています。私は、人の力で動けます。信じられる人が言うてくださったことは、頑張っ

■新設学部での教員生活：学生は真剣に学ぶ

私が日本で最初に教鞭をとったのは、英語教育を重視した学校で、最初は、教員の40%が外国人か、もしくは私のように外国で学位をとって外国で教えていた人たちだったので、授業に対する厳しさ、学生に対する厳しさというのはわりと共有してもらえたんです。学生たちも面白いことに先輩たちがいないので、大学生ってこんなものだろうと思ってすごく勉強したんです。だからここで「日本の大学生は勉強しない神話」は崩れました。学生さんたちに、一年生の基礎ゼミで私が出した期末レポート課題は、すごくむずかしかったです。今思い起こすとですね、28年前なん

ですが、学部の卒論に匹敵するほどのものを書いた人が数名いました。その人たちは、今やっぱりとても良い仕事をしています。企業ですが、いろんなところに力は応用できるんだと思います。3年4年生の時はサブゼミっていうのがあって、「本ゼミ」をした後、あと2コマ、つまり90分の授業が終って、90分90分つまり90かける3合計270分使ってゼミをしました。ずっと学生たちと一緒にいるんです。ですから、最初のゼミが終わったところで買い出し班を作っていました。楽しいことをしないと勉強もつらいので「モグモグタイム」を作りました。買い出し班が買ってきたものを一緒に30分ぐらい食べてから又、勉強をやります。ですからゼミ発表ももう半端なものではなかったです。グループ発表をするんですが、みんなすごい。長くは続きませんでしたが、一定の年数は学生たちもこれが水準だと思って頑張る、教員たちもこれが水準だと言って一緒に頑張りました。夜9時まで勉強しました。学生たちは、「うちのゼミは勉強サークル」と言っていました。なぜこういうことを言ったかということ、先ほどの対話者Dさんの質問への答えにもなるんですが、日本に帰って来たら体調悪化して、本当に歩けない時がありました。手も全く使えない時もありました。ゼミ旅行とかにはあまり行けない。年に一回がせいぜい。私だけは日帰りするかも分からない、だからゼミもフィールドワーク中心には出来ない。でも「あなた達がどこかに行きたい」と言った時には訪問先への口利きはするといい、それを実行しました。うちのゼミの学生はそういうフィールドワークとかないことを前提として入ってきているわけなので、「うちのゼミは勉強サークル」って表現したのだと思います。

■日本の大学生と学びに対する姿勢

実は私が日本の大学で授業したのはこの時が、初めてだったんです。アメリカでしかも大学院で

しか教えたことがなかったので、自分の学生時代、自分がどれだけ怠けていたのをすっかり忘れていました。それで、一年の基礎ゼミの時にかなり早い段階で学生さんのひとりに、「〇〇さんはどう思う」と意見を求めたんです。するとその学生が本当に椅子を10cmぐらいずらして、私から距離をとったんです。あれ、どうしたんだろうと思って授業の後、食堂で会った時に「〇〇さんごめんね、急に聞いてしまって。でも、さっき何であんなに椅子ずらしたん」って聞いたら、「先生、我慢やないけど今まで先生にどう思うって聞いてもらったことないからびっくりしたんです」と言われました。だから、「あ、そうだ」って思い出しました。アメリカでは自分が考えを持って自分が先生に聞かれた時に何か言わないといけないと言われてたけれども、日本ではそうじゃなかったって、先生の言うことをちゃんと聞いているのがいい子だったんだ、っていうのをまた思い出しました。ちょっと逆カルチャーショックでした。新設学部でその良さを実感しながら教え続けていましたが、私がいい学校、いい学部、優秀な学生と思っても、時間が経つと変わってくるんだなあというのもわかりました。それは先輩の先生にも教えられました。「渡部さん、青いな」って言われました。

ソーシャルワークを育成する学部ではない、総合政策に行った時は、学生にどんなことを教えたいと考えたかっていうことをちょっと自分で質問を作って回答しているんですが、自分がアメリカにいた時に、「考えることは役に立つ、関心のあることを追求することは楽しい」と実感したんで、限界はありますが、「考え続けると、そこそここのところに行きつけるよ」っていうことは伝えたいと思いました。

私自分自身あんまり群れるのが好きじゃなかったし、無理やりゼミに行ったら仲良くしないといけないとかっていうの辛いだろうな、ってなんと

なく勝手に思いました。なので、ゼミの運営でも一番最初に学生さんに言いました。「ここにいる間は一生懸命一緒に勉強して欲しいけど、別に無理して仲良しになる必要全然なし、仲良しごっこ不要。でもここにいる時には真剣にテーマに取り組んでね」と。だから「別に出席しなくても、授業中しゃべってるよりずっといいよ」とも伝えました。

学生さんには色んなことを教えてもらいました。人生やり直しがきく。自分で責任をもって道を選ぶ。変化を恐れない等です。卒業生たちが身をもって教えてくれた気がします。学生たちの中に最初は全然自分が思ったところに就職もできずものすごく落ち込んでいたにも関わらず、通信教育で他の資格としてその資格を使ってちょっとだけ非常勤で仕事し、一番なりたかった仕事に年齢制限があったから「最後だ」って受けて通った人がいました。私がアメリカで見聞きしてきた「敗者復活戦」を日本でもやったんです。

あとはさっき言った実践家の方たちとご一緒に勉強会をすることが出来てその勉強会の成果を「気づきの事例検討会」という本にして、2003年に一緒に出版しました。なぜ出版できたかという、ちょっとしたストーリーがあります。最初はこれ行政依頼のお仕事だったんです。そこに参加して下さった実践家の方たちは謝金ももらわず交通費だけで冊子作成に参加して下さいました。私は一応講師だったので謝金は頂きました。それにもかかわらず、参加して下さった実践家の方が全ての事例検討会を終えて私たちが一応冊子の形にした時、「お礼」と言ってお花と食事をごちそうしてくれたんです。そこで私は宣言をしました。「この花代と、この食事のお礼は絶対どこかでみんなに返すからね」って。それで私から出版社の方をお願いをしてもう一回、一から新しい事例検討会を実施し、冊子を本に作り直していただきました。その結果、皆さんも執筆者になって

いただきました。これは、とても楽しかったことかな。奥川さんとは一緒に「面接への招待」という教材ビデオも作りました。

■質疑応答

対話者 B: 前半のお話の中でアメリカで教鞭をとられたはじめの所で、学生の成績をつける時に評価の尺度がちゃんとないといけない、根拠を示せるということが必要だということを学んだとお話があったかと思うんですが、そこから時間を経て今度日本に帰ってきた時、逆カルチャーショックとお言葉もありましたけれども、アメリカで身につけた文化的な価値観も含めたところで日本に帰ってきた時に、今度日本の学生に対して評価の尺度をどのように伝えとか、日本独特のなんかこう言い回しとか曖昧さを含めた伝え方みたいなことが、日本の学生に伝えるための工夫が必要だったのかなとか、言葉が、ごめんなさいあのヒットしないかもしれないですけども、その辺りのこうアメリカの学生への伝え方で工夫されたものが、そのまま日本の学生にまた同じように適用できたのかどうか、むしろそれはまた違うオブラートに包む必要があったのかとか何かその辺あったら教えてください。

渡部先生: まず学生の評価の尺度なんですけどね、日本でそれが使えたか使えなかったかっていうと応用はできました。まず、論文の書き方を日本の学生たちがずっと大学に来るまでちゃんと習っていないということを自分自身の経験を通して知っていたので、冊子を作りました。1995年です。それは対話者 B さん達にも一部お見せしましたよね。だから、レポートや論文の構造を教えます。一定の長さを持つあるテーマを追求する論文であれば、枠組み・構造をしっかりと作った上で各々の章で何を言うべきかを考える、そのようなことを具体的に伝えました。私が、モデルとなるレポートも作りました。最初に教えたのが学部だったの

で、学部生向けに作りました。ある種のテンプレートなんです。ただし、テンプレートを私が作れても中に何を入れるかは学生の力なんです。アメリカでは小さい頃から、たくさんエッセーやレポートを書きます。小学校の頃からエッセーを書き慣れていて、論理的に物事を表現するという訓練を受けています。でも日本の教育システムはそうではありませんでした。だから、アメリカの大学と同様にはできません。日本ではそう簡単ではないということもわかりました。ただ、基本は使えました。テンプレートを提供したことで、学生たちは自分が考えを表明したら、その根拠を書かなければいけないのだ、ということを学んでくれました。

それから参考文献はちゃんと読んどけと言いました。文献の探し方も教えました。これをしていない学生たちが多かったので、当時に比べると、今は、文献も非常に探しやすくなっています。それとちょっと話が飛ぶんですが、日本女子大学の先生たちを見ていると、とてもきっちりとレポートにコメントをつけて、採点していらっしゃる。そういう方たちもちゃんといる。ただ、学生さんたちはそういうふうに採点されてきた経験がなければ、どう書けばいいかわからないので、その書き方っていうか到達点自体を私が低くしなければなりませんでした。

大学院教育と学部教育は違います。それも一年生のゼミレポートなんかから書いてもらわなければいけなかったのも、まず私が学生さんたちが出てくるテーマを使って、モデルレポートの骨組みを私が文章化し、それを見せる。あとは学生さんのレポート執筆の経過報告をしてもらう。書き終わってからでは手遅れなので、経過報告の時にほかの学生にもコメントしてもらう練習をしました。さっき「どう思う」って一年生に聞いたらビックリされたって言いましたが、みんな質問やコメントをするトレーニングを受けていなかったの

で、「必ず発表した人には質問をして欲しい」「ありがとうございます。とっても良かったです、では済まさない」、とお願いしました。尺度を私が持てたかという、もちろん卒論やレポートというものは、何を良しとするかは評価者によって違いはあると思います。しかし、議論が論理的かどうかは同様な評価ができます。もちろん私が全く知らない領域のことであれば、論理性があるかどうかに関しても、筆者が参考文献の内容を誤って要約すれば、正しい評価ができなくなります。でも研究者として、「この人すごいなあ」って私が尊敬していた他領域の先生たちと、同じ論文を評価をした際、コメントのポイントが一緒でした。

対話者 E：先生ありがとうございます。先生の本の「はじめに」の青い鳥の所、私もいいなって思っ。あ、私はちゃんと最後まで読んで言ってます。あそこすごいつかみは OK などところで、私と同じ人もいるんだなと思ったので、その先輩も全部読んだのかもしないし、手に取った人が自分と重ね合わせて読める導入部分なのかなと思っ。たんですけど、まあ色々聞きたいこととかはあるんですけど、多分あの今回からその「教わる立場から教える立場」に急に変わっているんですけど、元々そのなんかすごい遡りすぎかもしれないんですけど、小さい時から割と教えることってというのがこうなて言うんでしょ、割と不得手じゃなかったのか、あのこういろいろキャリアを考える中で教えることを仕方なくっていうんじゃ語弊があるんですけど、合ってるか合っていないかというような話かもしれないんですけど、どういうふうにあ捉えていたのか。でも私は先生に会った時から「すごい上手」っていうか育て上手なので、この日本に帰ってきたところにこの関西学院大学の先輩の先生に「青いね」って言われたあたりとか聞くと、すごく先生にこんな時代があったと思っ。た、っていうなんか感想みたいな質問みたいな。もう一個いいで

すか、途中で多分介護保険っていうのができたんだと思うんですね。そのソーシャルワーカーすごいソーシャルワークにすごいコミットしてたと思うんですけど、その介護保険っていう中でそのケアマネジャーさんっていう方たちを中心とするその相談援助の方達に、その奥川先生が非常に熱狂的にこうあのなんて言うんでしょ、こうついで行きたいとしている中で、渡部先生もそこにこう渦に入っていたと思うんですけど、思いがけないことだったのか、その時どんな風に何か思っ。ていたのかっていうことなども聞けたらと思っ。た。

渡部先生：人は問いかけていろんなことに気付くということがわかりました。質問で色々思っ。出させてくださり、ありがとうございます。言いたいところを抜かしてはいたっていうのがよくわかりました。

対話者 D：私も関連してさっきの奥川先生のところを。私が渡部先生を知ったのは「面接への招待」っていうあの中央法規から出たビデオのプロモーション講義ですね。二人のコラボの研修を受けた時に、もう膝から倒れるような、こういう事なのかみたいな衝撃的だったなということと、あと私自身もさっきの「青い鳥」のことが書かれている本の古いほうの『高齢者援助における相談面接の理論と実際』（注：医歯薬出版第1版のこと。その後第2版出版）っていうのは、その当時、先生を知っていたのか知らないか分からない、その前後がわからないんですけど、あの本は本当にあの実践している人が本当にこう困りごとがずっと入ってくるっていう本だったの覚えてます。あの特に悩んでいるとかバーンアウトしそうな時に自分の思いと組織の想いは違っ。たっていうところなんか納得して、じゃあ自分が進むべき道はあの大切なきゃいけないのはどういうことなのかなってことを改めてあのすごく迷った時に読んだ時にすっ。と落ちた。そんな実践家が欲し

かった本だったんだなあっていう風に、その当時1999年ですかね、衝撃的な本だったのを覚えています。なのでまああのこれは質問じゃないですが感想でした。もうちょっと振り返ってみると、あのなぜじゃあ先生がこの政策の学科に行ってもあ社会福祉士はもう1987年ていうか1990年ぐらいにはもうあの資格問題があって、私が取った頃には第四回目だった1993年とかその頃は、なのにまあ先生はあえてその学科じゃないここに行っちゃったという経過がわかったということ、あえて社会福祉士のそのカリキュラムにのらない、何ていうあのカリキュラムにのらないような講義をしたっていうところが良かったとは思いますが、まあもったいないっていうか、本当に学びたい人が学べないところに先生がいたんだなあっていうことを改めて思った次第です。意見っていうか感想でした。

対話者 A: 私も伺いたいのは対話者 E さんがおっしゃったことと似ていて、やっぱり介護保険っていうのはすごく大きかったと思うしケアマネとソーシャルワーカーって違うんですか、同じなんですか、私よく分かんないんですけど、あの前にも渡部先生にはお話ししたことがあると思うんですが、私は、ちょうど介護保険ができる時にあの学部生だったんですね。なので当時副田あけみ先生が、もうケアマネが入ってくることで日本の高齢者福祉は無くなるって言ったんですよ。ああそうなんだ、ふうんって思ってなんかすごい危機感っていうのか、なんだったんですかね、副田先生はいらっしゃるのでまた聞けばいい話なのかもしれないんですけど、なんかその措置から契約とかそういう意味とはまた全然違う、何か今まで積み上げてきたものがこう結構壊されちゃう、壊されちゃうっていうのもなんか違うんですけど、なんか先生たちがすごく危機感を抱いてるっていうのは学生としてもすごくよくわかって、その後介護保険になって何が変わったのか、私はよく分

かんないんですよね。だからその前を知らないの。だからそのあたりは先生はどう思われたのかなって。それはあのむしろ総政にすることで社会福祉学科が違って見えたかもしれないと思うので先生のご感想を伺えればと思います。

渡部先生: なんか皆さんの質問とっても良かった、私、どこから話そうかなと思って、ちょっと介護保険絡み、介護保険とソーシャルワークというところを共通に話してくださって。対話者 B さんのは先にお答えさせていただいたので、ここ行きたいと思います。私がさっきお話をした白澤先生から声をかけられたっていうのがありましたね。奥川さんと一緒に在宅介護支援センターの研修をしないか、と誘ってくださったということ。白澤先生はソーシャルワークの中にあるケースマネジメントという機能を、介護保険におけるケアマネジメントでも強調したかった。そこにはもっとソーシャルワーカーとして相談業務が入ることを期待していたと感じました。対話者 A さんの質問への回答、在宅介護支援センターなど、それまで高齢者の福祉をしていた人たちは相談業務をしていたんです。ところが公的介護保険ができて、その下にケアマネジャーが置かれることになりました。受験できる人々の基礎資格も非常に広範でした。種々の条件によって、ある種高齢者福祉マイナス、ソーシャルワーク、イコール単なるブローカー、つまり、サービスと利用者を結びつけるだけの存在になりそうだったんです。主目的はケアプラン作成、サービス調整。今もずっとその危ういロープの上を歩いています。ケアマネジャーはソーシャルワーカーが考える広義のケアマネジメントをする制度にはなっていません。介護保険が要求するケアマネジャーの仕事内容などをつらつら読んでいくと、単純なブローカーだけでいいのかな？とも解釈できます。だから多くの先生たち、つまり制度作りをつぶさに見て来られていた先生たちが危機感を持って当然です。でも私は、

その時もケアマネジメントは、ソーシャルワークと言うところの広義のケースマネジメントと考えていた。私アメリカにいた時に、白澤先生に声をかけてもらって共著論文を書いたんです。私の担当部分は、ソーシャルワークにおけるケースマネジメントの特性を調べることでした。ソーシャルワークの学部でケースマネジメントって当たり前の機能として教えていたんですよ。それは地域生活をしているクライアントたちが複数のサービスを使う時に、自分ではマネージしきれないので誰かがそれをちゃんと見ておいて、うまくサービスが繋がっているかな、この人の地域生活を損なっていないかなということをやるのが、ソーシャルワークのケースマネジメントだったんです。その中で非常に重視されたのが、エンパワメント。その中で利用者、つまりクライアントがちゃんと自分の力を感じてそれを最大限使って生きて行けることが大切であることでした。私は、ニューヨーク州にあるソーシャルワークの大学院でケースマネジメントを教えている先生達に、電話インタビュー調査をしたんです。1992年か3年だったと記憶しています。その当時看護でもケースマネジメントが出てきたんですね。これはケースのマネージです。どうすれば少しでも水準時間内になすべき事を済ませて効率よく仕事ができるか、つまり今みんなが言っているタイムパフォーマンスです。それとどこで一線を画することができるのかをしりたかったのです。当時ソーシャルワークの先生たちは、やっぱりどうやって独自性を残していこうか、ケースマネジメント危ないぞって思ってたんです。ケースマネジメントという言葉が誤って全面に出てしまうことが、それでソーシャルワークの先生たちはそこに何を独自性としてしっかりと残しておくかということを考えた時、ソーシャルワークが大切にしてきた、あの根幹には人権があるんですが、利用者が主役の、そしてその主役を生かして行くためのお手伝いをするの

がケアマネージャーであるという結果でした。今のは研究結果を単純化した私の言い換えです、こんな調査研究をしたんですね。

対話者Aさんの言われたことの一部はその通りです。私、総合政策にいながらも政策のことわからないので、日本の現実をあんまり考えてなかったんです。その後、在宅介護支援センターは影を潜め、地域包括支援センターが別ものとしてできたことをきっちりと検証しないで次々新しいものを作っていくという制度設計、これは対話者Cさんともしゃべりましたよね、私、授業の時に、在宅介護支援センターや軽費老人ホームの役割と課題を振り返らないで、サ高住（サービス付き高齢者住宅）を作ったりしているのは何なんですかね、という疑問はずっと持ってたんですね。私は、その程度の制度政策の知識なんですけどね、だから社会福祉研究者や実践家が危機感を感じたこと、凄く分かります。奥川さんが昔言ったんです、「私は、別に誰がねケアマネージャーになってもいいのよって、ただその人たちが真っ当な仕事をしてくれれば」。厚生労働省が2001年に実施した全国のケアマネリーダーを集めた研修は、実際にケアマネージャーが仕事をしてみたら、難しいケースにぶつかって、ケアマネには対人援助職、ソーシャルワーカー、としての力がいるんじゃないか、ということに気がついた結果のものだったようです。当時専門官をしていた方が実践をわかってる人で、奥川さんに研修の講師を頼んだと聞きました。恐らく、スーパービジョンもしくは事例検討会をちゃんとやらないと日本のケアマネ潰れるよ、と危惧されたようです。

その時、私に奥川さんが声をかけてくれたんです。「あんた一緒にやんない」って。私は実は最初は断ったんです。「だって、介護保険のケアマネージャーが相談援助までできないじゃないですか」って言ったんです。「職務内容はかなり縛

られていますよね。そんな内容の研修は、そっぽ向かれるだけです、奥川さん」って言ったんです。そしたら奥川さんは、さっきのこと言ったんです、「私、誰がなろうといいの」ってね。「真っ当な仕事をしてくれる人を育てなきゃいけないじゃない」。私は、「奥川さん勇気ある」って思いました。また戦うんだって思いました。それで「その戦いに私も参加します」みたいになって、それから二人でもものすごい準備したんです。奥川さんも私もレジメをしっかりと作って、奥川さんをご自分がそれまで指導してきた優れた実践家の人たちに声を掛けて、サブレクチャーっていうかね、私は奥川さんと二人で講師だったんですけど、リーダー研修参加者をグループ分けしてグループで体験してもらおう壮大な計画を立てたんです。グループスーパービジョン、あのいわゆる奥川グループスーパービジョン(OGSV)を全国の人たちとやろうという、とてつもない壮大な計画でした。そのためにはどんだけ準備が必要かっていうのがあったんですけどね。でもそんな中で、やっぱりしっかりと対人援助の視点を持てる人を育てていかなきゃいけないっていう思いで、私もそこに入れてもらいました。でもその時も私はまだ思っていたんです、「受講するケアマネジャーたちの多くはそっぽ向くだろうな」と。ところが皆さんそっぽ向かなかったんです。研修を通じて、真剣に利用者さんに向き合って考えることの楽しさ、全国の代表ですからね、援助職の本来の姿に魅力を感じてくれたんです。もう笑っちゃうような「嬉しい奇跡」が起きた。でももちろんリーダーさんの中の何名かは、こう腕組みして、「つまんない」っていう顔してずっと座ってる人もいたんですよ。

ところがその後、研修内容を各都道府県で「伝達研修しなきゃいけないかったんです。伝達研修しろって言われてもこんな難しいことが簡単に出来るはずないです。だってスーパービジョンって実

践家の最後の最後にたどり着くところでもん。実践がわかり、ちゃんと何が起きているかの説明力も持ち、スーパービジョンに参加しているみんなに目配りができないといけない。つまりグループワーク理論も含めた深い実践理論も修得する必要がありました。なので簡単にやろうとは思わないのですが、伝達研修のおかげで真剣になったんです。ちゃんとやらなきゃって。その時に私も『気づきの事例検討会』の本を作ってるんです。その結果、私や奥川さんが研修に呼ばれるようになりました。簡単にスーパービジョンなんて教えられないんですけどね。少なくとも皆さんがスーパービジョンを誤解しないように、つまり、非難ばかりしたりほめてばかりしたりしないように動き出したんですね。実はスーパービジョンの基礎には、関係形成力、相談援助面接力、内省力にあります。そこでその時にみんなに相談援助のことを分かってもらわなければいけないと思って作ったのが『面接への招待』のビデオだったんです。私や奥川さんやその他の講師の人が全国を飛び回ったって行ける回数、会える人数は限られてます。でも、本や教材を作ったら広がりやすいし、できる人が頑張ってくれるっていうので作りました。教材づくりは私の願望だったんですね。あの早い段階でお話した、バウファロー大学で新人の教員仲間のリビーと私が教育の助成金をもらってビデオ作ったって言いましたよね。それはすごく役に立ったんです。実践家に良いモデルを見せたい。質は落としたくない、と思いました。だから、そのビデオに出てもらったのは優れた実践家の人たちなんです。その人に私たちが作ったシナリオを渡して、これをあなたが担当するとしたらどんな風に展開するかやってくれて、クライアント役は役者さんを雇いました。役者さんには大まかなシナリオだけ言って、あとは自由に動いていただき、実践家にも自由に動いてもらいました。そのビデオに私とリビーで解説を作ったのです。似

た方式を奥川さんとビデオを作った時にも使いました。この時は全員俳優さんです。こういうのをしたいと出版社に持ちかけたところ、すごく熱心かつ時間をかけてやってくれました。ほとんど毎月、奥川さんと出版社の人が神戸に来て下さり企画をねりました。私がリウマチで動けなかったので、ホテルに泊まり込んで打ち合わせをして、どんなストーリーにしてどんな解説をするか話し合いました。私たちが大事にしたかったことは、「実践家の頭の中でどんなことが考えられているかをちゃんと解説すること」だったんです。いいモデルを見せるのは大事だけでも、なぜそういう行動をしたのかの解説がなければ、ひょっとしたら誤って解釈されるかも分からない、だからビデオは面接の場面のモデル的なものを作って理論的な解説をし、なぜそのソーシャルワーカーがそうしたかを説明しています。その時のセッティングは、在宅介護支援センターです。事業所にはしていません。事業所だったら、即刻「はいショートステイですね」とか「はい何とかですね」と、話を充分聞く前にサービスが提供になる可能性があったのです。だからそこはね、私も奥川さんもわかりながら、理解しながら。難しいことは知っていました。ソーシャルワークではないんです。制度的にはケアマネジメントで、ソーシャルワークをしっかりと取り入れるようになっていません。でも、制度は、不思議な曖昧さも残しています。利用者主体などは、その例です。ソーシャルワークのケースマネジメントの理論では、実はケアマネジメントには複数のモデルがあるんです。狭義から広義、どこまでケアマネージャーが責任を持てるのかも依拠するモデルによって変わります。サービス提供者主導型が日本のケースマネジメントの実情かもしれません。利用者主導型が対極にあるんですが、それは利用者のニーズに合わせて必要なサービスを見つけ組み合わせしていく。でも介護保険では、最初からサービスの種類が決まってるんで完

全な利用者主導型は難しいんです。

職務内容、権限、使える時間を考えると、利用者主導の実践をするのは覚悟がいります。心ある、そして学び続けているケアマネージャーたちは極めてソーシャルワークに近いことを実践してくれています。もちろん制度の範囲内ですけどね、知識やスキルを使って質の高い仕事をすることも可能です。

「面接への招待」のDVDを作った、それから「気づきの事例検討会」の本を書いた、それから気づきの事例検討会のビデオも作ってるんですが、それらはすべてクライアント、利用者のことを忘れないでケースマネジメントをして欲しいという思いの表現でした。そんな仕事を目ざすと、つらい思いをするのは分かる。でもソーシャルワーカーって元々ジレンマを抱える仕事。でもソーシャルワークなど知らないで、ケアマネになった人は、私等の研修なんか聞いたら、本当にすぐ帰りたくなるでしょう。「何を理想論を言っているか」って。だから、私いつも研修の時に言ってます。私が言うようなこと、私が言うような実践をやりたくない人もいると思うって。法定研修する時には非常に辛い思いをしていました。主任法定研修って主任ケアマネになったら来ないといけないんです。そこでね、スーパービジョンを教えるんです。そんな形での実践なんか別にやりたくない人も中にはいるんです。ソーシャルワークの話聞きたくない人もいるんです。そんな方達を目の前にして喋るのは矛盾を感じました。

ケアマネさんたちと喋っているとね、これまたちょっと理想論っぽい話なんですけどね、実はケアマネさんが、あと包括も一緒ですけどね、問題を発見できる立場にいるんです。日本ってソーシャルワーカーが本来の相談活動に携わりにくいし、在宅介護支援センターもほとんどなくなりました。カウンセラーの仕事はちょっとソーシャルワーカーと違うし、というところで、本当は制度

に繋がらなければいけなかった人や誰かのサポートが必要だった人たちがおうちの中にずっとこもって、さっきの一番早い話に戻りますが家族の中だけで片付けようっていうメッセージが出ていたんです。でもそんな問題に気づけるのがケアマネさん。だから、ケアマネさんがちゃんとした目をもってさえくれば、つまり自分ではできないけれども、そして1人で抱え込んではいけなくけれど、これ看過できないかどうかの判断力（アセスメント力）を身につけておけば、そうすれば適切な時期がきた時、その人たちを必要な支援者と繋げることもできます。もちろんたやみくもに家族に支援を受けるよう助言してはいけません。まずは利用者さんの信頼をえられる仕事をする。その上で「この人ちゃんと私のことを考えてくれている」と利用者さんに思ってもらえれば、いつかどこかにほかの家族のメンバーの支援にまで繋がる可能性が高いんですよ。可能性をすごく秘めている。私も今、人に言われるんですよ、なんでソーシャルワーカーじゃなくてケアマネの研修をするのって。でも、可能性にかけています。

対話者Eさんが教えることに関して質問いただきました。私が教育に携わっているのは、多分性格が「お節介」で誰かにそれが役に立ったら嬉しいのだと思います。そのためには、もちろん相手にとって何が役立つか？をソーシャルワーカーのように考えて動くことが大切だと考えています。自分の思いだけで人を手伝わない。それから、あと対話者DさんやEさんが言ってくれた、私の本が実践家にとって役に立ったよって言うてくださったのはとても嬉しいです。アメリカに留学した当初の理由は、実践家として力を付けたかったからです。だから大学院で講義を聞く時も、本を読む時も、職場で同僚と会話する時も、ずっとこれは実践レベルで言い換えればどう言えるのだろう、日本ならどうできるのだろうと考えながら聞いたり読んだり対話したりしていました。だから

最初に単著を出版した時にも、抽象的なことだけ書いたら自分が落ちつけない。でも事例と、それへの解説だけ書いたら「あなたの主観でしょ」と言われるかもって思いました。それではいけない。実践家が、ちゃんと実践家として、根拠をもって研究者とも他職種の人とも話し合えるようになりたい、そうあって欲しいというのが私の留学の理由なんです。だからソーシャルワークの実践家が医療従事者等と会議で話をしている時、「ソーシャルワーカーって、すごい主観的だよな」と言われないように、根拠も示して話ができたいと思います。何よりも大切なことは、根拠を示しながらもクライアントの個別性、全体性が他職種にもしっかりと伝達できることだと思います。生活者視点、人権尊重、自己決定等々。それらの言葉の意味を再度考えること、その上で実践することの大切さを痛感しています。これで終わります。ありがとうございました。